

歴史の中の女たち <第16回>

イサベル・モクテスマ —アステカ王国の皇女—

伊藤 滋子

〈テクイチポ〉がイサベルの元の名であった。ナワトル語で〈王家の娘〉あるいは解釈によっては〈綿の花〉を意味するという。アステカ王国がスペイン人に滅ぼされた1521年以前の彼女のことについてはほとんど何も分かっていない。そもそも女性が歴史の表面に出てくる事はまずない。一般的には征服時に彼女は11、2才だったとされているが、「母方の祖父に可愛がられた」というのちの裁判の証人の言を信じるとすれば、17~19才ぐらいであった可能性もある。ほぼ確かなことは彼女がアステカ王モクテスマ二世の19人の子供のひとりで正嫡、すなわち正妻の娘だったということだけである。アステカの上層階級は一夫多妻で、モクテスマには何百人の妻がいたといわれるが、彼女の生母テカルコは前王の娘という出自から、とりわけ勢力があった。150年間メキシコ高原を支配したアステカ王国の最盛期に王女として育った彼女は美しく気位の高い女性であつたらしい。習慣に従い、幼少時すでに母方のおじと最初の『結婚』をした。だが将来つぎつぎと5人の夫を持ち、7人のメスティソ（混血児）を生むことになろうとは、誰が想像しただろうか。

スペイン人がメキシコ海岸に出没し始めたのは1517年来のことであったが、いよいよ1519年、エルナン・コルテスは本格的なメキシコ征服をめざして現在のベラクルス付



モクテスマと話すイサベルと弟のアシャヤカ

近に上陸してきた。モクテスマのもとには海岸地方におけるスペイン人の動きは逐一報告されていたが、迷信深い王は白人の到来を昔去っていった白い神の帰還と考え、決定的な手を打たないまま内陸部の高原にある首都テノチティランに迎え入れてしまう。そして数日のうちに虚をつかれて捕えられ、家族や重臣とともにスペイン人の陣内に幽閉されてコルテスの意のままに動かされる身となつた。王はこの時コルテスに3人の娘を贈っているが、他部族の首長と姻戚関係を築いて友好を結ぶのは彼らの昔からの習慣である。

両者の表面的には平和な共存は半年間続くが、ベラクルスにコルテスに取って代ろうとする別のスペイン人部隊が到着し、彼がそれ

を迎えたために出かけている間に、留守を託されたアルバラードの不手際からアステカ側の反乱が起こる。そして戦勝したコルテスが相手の兵士も自分の部隊に引き入れて戻ってきた時にはもう手のつけられない状態になっていた。もともと500人だったスペイン人の数は倍増し、友軍の先住民の数も数千人と膨大である。ところがテノチティランは湖に囲まれた水上要塞都市で、外部とは3本の堤道で結ばれているだけであったから、食料の確保は容易ではなく、市場も閉鎖されてしまった。コルテスはモクテスマの要請に応じて、その弟クイトラワクを遣って市場を開かせようとした。しかしすでにモクテスマを見限っていたアステカの人々は解放されたクイトラワクを新しい王に戴き、攻撃は以前にも増して激しくなった。モクテスマはコルテスの指図で民衆をなだめようとしたが、「裏切り者！」とのしのる彼らから石を投げられ、頭に負った傷がもとで3日後に亡くなる。このとき王は嫡子のテクイチポとアシャヤカ、それにアナ、マリナ、マリアの3人の娘をコルテスに託して逝ったという。スペイン人は猛烈な攻撃と兵糧攻めについて耐えきれなくなり、暗闇に乘じてテノチティランからの脱出を図った。しかし堤道はところどころに切れ目があり、取り外しのできる橋がかかっているという要塞都市である。すぐに見つかってアステカ軍の猛追撃を受け、スペイン人は1100人中400人ほどが生き残ったのみで先住民の死者は数知れず、80頭の貴重な馬は23頭になるという甚大な被害を蒙った。『悲しき夜』として伝えられる敗走である。

テクイチポはその混乱の中でただひとりの同母弟アシャヤカをはじめ、ほとんどの家族を失った。死んだ異母姉アナはコルテスの子供を宿していたという。しかしテクイチポは奇跡的にアステカ側に救出され、新王で叔父

のクイトラワクの妻となる。モクテスマの正嫡である彼女との結婚によりクイトラワクの王位はより権威あるものとなった。だがその2ヶ月後、王は天然痘に罹って急死する。抵抗力をもたない新大陸の先住民にとってヨーロッパ人がもちこんだ伝染病は非常な脅威となり、人口減の最大の原因となった。後継者で最後のアステカ王に選ばれたのはほとんど無名のクアウテモクで、有力な貴族が人質となったり戦死してしまったいま、人々は18才の若者に国の運命を託さなければならなかつたのだ。テクイチポはこんどは彼の妻となった。ふたりは従兄妹であった。

テノチティランから追われたコルテスは同盟関係にあったトラスカラにおいて、湖上で戦うための13隻の船を建設するなど周到な準備を整えて、一年後ふたたびテノチティランを攻め、1521年8月13日ついにアステカ王国を滅ぼした。妻や重臣とともに湖上をカヌーで逃げようとしたところを捕えられたクアウテモクは、征服後も王位についたまま、コルテスの指図に従って膨大な数の死者を葬ったり、壊れた水道橋を修理したり、瓦礫を取り除いて新しい建物を建てたりする命令を出しが、一方では金の在りかを追求するために拷問にかけられたりもしている。

テクイチポは貴族の女たちとともに湖の南に位置するコヨアカンにあったコルテスの館に送られてそこで暮らし始めた。その間彼女と夫がどのような生活をしていたのかは不明である。当時その館には先住民やスペイン人のさまざまな女性が住み、まるでコルテスのハーレムの様相を呈していた。征服の翌年にはその中へ、キューバに残してきた彼の妻カタリーナが母をはじめとする一族郎党を連れて乗りこんできた。その2カ月後、メキシコ上陸以来ずっとコルテスに付き従ってきた先住民女性のマリンチェが彼の子供を出産した

かと思えば、数週間後にはカタリーナが謎の死を遂げる。真相は不明だが、コルテスが妻を殺したという噂は終世彼につきまとった。

征服から3年後、イブエラ（現在のホンジュラス）に送った部下が反乱を起こしたため、コルテスはスペイン人250人と先住民の部隊を率いて中米へ向う。メキシコの各地方に隊を送り太平洋へ抜ける海峡を探すことによ起になっていた時期で、部下の懲罰だけでなくその探検も目的のひとつであった。出発後間もなくコルテスは、2才になる子供を残して通訳としてつき従ってきたマリンチェを部下のひとりと結婚させている。それはテクイチポの将来を暗示するでき事であった。そしてまた、この隊に同行していた彼女の夫クアウテモクのおぞましい処刑もこの遠征中のことであった。ある先住民の首長がコルテスの元にきて、クアウテモクが反乱を企てていると通報した。コルテスは深く精査もせず、クアウテモク以下数人のアステカ貴族に拷問を加えてそれを白状させ、絞首刑にしてしまった。熱帯のジャングルを切り開いて蚊や下痢、食糧難に悩まされながらの困難な行軍で、正常な判断力を失くしていたのかもしれない。それは危険で得るもの少ない、失策ともいえる遠征であった。彼の統治はまだ安定とはほど遠い状態で、メキシコ市では消息を絶った彼を死んだものとして、その利権を奪おうとする者たちが好き勝手に振る舞い、1年半の不在のあと彼が奇跡的に帰還してきた時、人々の驚きは大きかった。

夫が遠征に連れて行かれたあとキリスト教の洗礼を受けたテクイチポは今ではイサベル・モクテスマと名乗っていた。コルテスは未亡人となった彼女を生き残っているモクテスマの唯一の正嫡と認め、彼女とその子孫にタクバとそれに付随するエンコミエンダ（莊園）を与えた。それはメキシコ高原で最大の

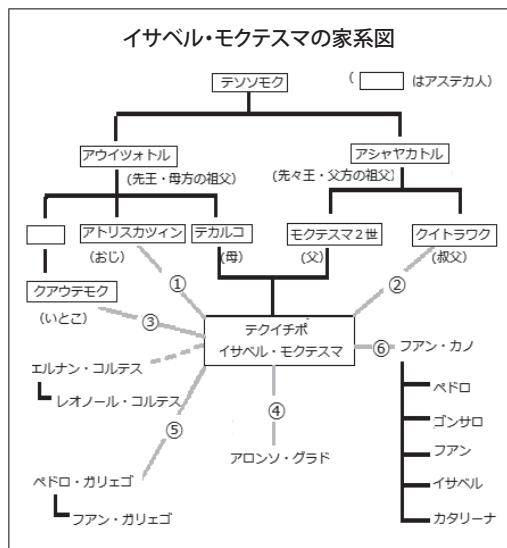
面積を持つずば抜けて豊かなエンコミエンダであった。そしてそれを持参金として、部下のひとりアロンソ・グラドと結婚させ、彼女を後見するというモクテスマとの約束を果たした。グラドはもともと反コルテス派に属し彼に反感を抱いていたが、懲罰を受けたあと心を入れ替えたのか弁舌巧みにコルテスに取り入り、その忠実な部下となった。楽器が弾けて話題が豊富で人気者だったというから、人付き合いが上手だったのだろう。だが彼は1年もたたないうちに死ぬ。死因は不明でまだ子供はいなかった。法律上女性は先住民や未成年と同じく一人前の人格を認められず、財産の管理は夫または息子の手に委ねられるのが普通であった。逆にいえば、夫を亡くした女性が未亡人のままでいることは許されなかった。自力で財産を守る権限もなく、スペイン語の読み書きもできないイサベルはコルテスの家に戻ってその庇護を受ける以外に道はなかった。

コルテスは次にイサベルを4人目の夫、ペドロ・ガリエゴ・デ・アンドラーダと結婚させる。しかし彼女はこの時すでにコルテスの子を妊娠中で、半年後、レオノール・コルテス・モクテスマという娘を出産する。イサベルは自分が生んだ赤ん坊の顔を見ようともせず、その養育を拒否して生涯この娘を拒みつけ、遺言状にも一切彼女には触れていない。そのこと自体、イサベルがどういう状況でコルテスの家で暮らしていたかを明白に物語っているが、誇り高い彼女には耐えがたいことだったに違いない。これはすべての征服者にいえることだが、彼らには本国に帰って貴族の女性と結婚し、社会的地位を得たいという強い欲望があった。運よく？妻を亡くしたコルテスもメキシコで結婚する意志など全くなかった。彼の親戚に引き取られたレオノールは父親の陰ながらの庇護を受けて育ち、のちに裕

福な鉱山主と結婚した。

イサベルはその後夫との間に長男ファン・アンドラーダ・モクテスマを生むが、結婚3年目にまたしても夫を亡くした。そして同じ1531年のうちに5番目の夫ファン・カノ・デ・サアベドラと結婚する。通説のように彼女が1509年生まれだとすればこの時彼女はまだ22才で、カノの方は30才前後である。コルテスは念願叶ってスペインで貴族の女性と結婚し、その前年にメキシコに帰還していたが、もうイサベルに干渉するつもりはなかつたようだ。奇しくも、コルテスもイサベルの3人のスペイン人の夫も皆エストレマドゥーラ地方出身である。だが、今度は生まれて初めて自分の意思で選んだ結婚相手だった。とはいえる、さほどロマンチックな話ではない。カノはコルテスの下で地方の征服に戦功をあげ、エンコミエンダとメキシコ市内に土地を与えられた精力的な野心家で、彼はこの結婚によってアステカの王女を妻にするという社会的な名譽と、妻が所有する壮大なエンコミエンダを同時に手にすることことができたし、イサベルにとっても自分の代理人として財産を守ってもらえるだけの能力と社会的素地を備えた夫を得たという意味で、二人の利害は一致したのである。カノの父はスペインのカセレスの市長、叔父は王室に出入りする秘書で、これまでの夫と違い本国でも比較的影響力を行使できる家柄であった。

カノはすぐさまイサベルの財産を守ることにとりかかったらしく、結婚の翌年以来、立て続けに土地をめぐる訴訟を起している。カノが要求した土地にはイサベルの数人の異母きょううだいの土地をはじめ、副王宮殿が建っている土地まであった。そこは昔モクテスマの宮殿があつ場所だから、イサベルに帰属するとして所有権を要求したものだ。裁判はイサベルよりも22年も長生きした夫の手



で彼女の死後も延々と続けられたが、思わしい結果は得られなかった。

1550年に比較的若くして（40才？）死んだイサベルはそれ知るべくもないが、ほぼ20年にわたるカノとの結婚生活で平穏を得た彼女は、5人の子供にも恵まれようやく幸せを掴んだようである。遺言には自分が所有する先住民奴隸の解放を命じているが、そこには自ら先住民として理不尽な差別に苦しめられた彼女ならではの思いがこめられていた。2人の娘は莫大な寄進によって、征服者たちの正嫡の娘、すなわち白人女性しか入れないコンセプション修道院の尼僧となつた。またイサベルの子孫から伯爵、侯爵などの爵位をもつ貴族、騎士団に属するものなどを輩出し、モクテスマの血筋はスペインでもメキシコでも生き残つた。子孫のひとりはスペインのカセレスにモクテスマ宮殿として残つてゐる城を建てた。またウイーンの博物館にある、豪華な羽毛でできたモクテスマの王冠の返還を今なお要求し続けている子孫もいる。

（いとう・しげこ）